

全学院教職員礼拝

生きる

2021年7月14日

中高宗教主事 大久保 直樹

聖書:創世記2章7節

7 主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。

.....

聖書:マタイ7章12節

12 だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。

「大久保先生、今日は大冒険をしてきたんだよ～」7月9日(金)のこども園5歳児礼拝で、とっても嬉しそうな笑顔で、そして誇らしげに、こどもたちが伝えてくれました。なぜ「大冒険」かと言いますと、今、私たちは梅雨の季節を過ごしていますが、ちょうどその日も降りやまぬ雨の中を、みんなでお揃いの白色のポンチョを着て、先生方に連れられて並んで歩いて礼拝堂まで辿り着いていたのです。中高から礼拝堂に向かっていた私は、そのカルガモの親子のようにという表現がふさわしいかどうか、失礼であつたらごめんなさい、でも本当に愛らしいその姿を目にして心がほんとうに温かくなりました。でも同時に「あっ、しまった。こども園から礼拝堂に移動するのは、晴れた日でも、坂道や階段が結構大変だから『雨や風で天気がよくないときは、私がこども園に向かいます』と園の先生には言っていたのに、来させてしまった～あぁしまった～」とちょっぴり冷や汗がという気持ちが優っていました。でもそんなときに、引率の先生からも、「今日は大冒険をすることができたんですよ」と言っていたとき、また礼拝を始める直前にこどもたちからも同じように言われたとき、雨の中礼拝堂に向かう大変さを、大冒険というお楽しみに思えるように、どの先生方のこどもたちへのご配慮に感謝すると共に、こどもたちが素直に大冒険をしたと思っていることに感動を覚えたのでした。

『信じる』ということテーマにサンタクロースを扱った記事を高校生に読ませたところ、ある生徒は幼い頃のクリスマスの自分について次のように書いてくれました。

「サンタさんとやりとりするために手紙を書いたり、クッキーを並べたり、一度はサンタさんを見ようと夜遅くまでこっそり起きていたり、両親が私たちのために絵本のような世界をつくりあげてくれたことは今でも素敵な思い出として大切にしています」

大人となった私たちが、雨の日にこども園から礼拝堂まで歩くことを大冒険だと感じ

る人はひとりもいないでしょう。でも子どもたちにとって、それは本当にそう思っている。大人となった私たちが、クリスマスにサンタを見ようとして夜遅くまでこっそり起きているということはしません。でも幼い子どもにとってはそれが真実の世界としてあり得るのです。

人は生れてから育ってゆく中で、それぞれに与えられる経験や出来事・出会いの中で、特に幼い頃には自分の中のイメージと現実が一致・重なっているときもあれば、成長の途上において自我に目覚め、現実はそうではなかったということに気づき、気づかされ、改めて物事をとらえ直すという「心と頭の作業」をするプロセスを歩みます。先ほどの信じるというテーマの記事を読んで感想を書いた生徒とは異なる他の生徒は、次のように素直に書いてくれています。

「今考えれば信じがたい理由を嘘について話す大人の言葉を純粋に信じて想像をふくらませている子どもの頃の気持ちはもう手に入らないものなのだと深く考えて少しさみしくなりました」

これは今現時点でのその生徒の正直な思いです。これはこれで大事。しかしこの後彼女がどのような人生を辿るかはまさに神のみぞ知るというところではありますが、たとえば、保育士になるかも知れないし、結婚をして子どもを与えられることになるかも知れません。そのような未来を生きる彼女が、『わたしにはもう純粋に空想の世界を信じる気持ちはないから』というスタンスで子どもたちに接することは決してないでしょう。彼女の言葉を借りるなら、『信じがたい理由を嘘について話す大人』になっているのだと思います。別の言い方をすれば、かつて持っていた想像することの素晴らしさ・信じることの素晴らしさを、今度は伝える側の人間になっているのでしょう。

今日はドデカイといっても良いくらいの説教題にしてしまいました。『生きる』などと大それたタイトルですし、テーマです。なぜこのような説教題になったのかと申しますと、わたしが高校3年生の聖書科の授業で扱うテーマがまさにこの『生きる』ということから、今回の教職員礼拝で授業で扱っている内容を共有させていただければと思ったことが、こんな説教題になってしまった理由です。授業内容を簡単に説明しますと、誕生からこれまで、高校3年生ですから17歳18歳、つまりこれまでの17年間18年間を振り返ります。自分の意志ではないところでこの世に誕生し、そして幼い頃は特に、親をはじめとした周囲の近い人々に育てられ生かされ、そして自我に目覚めた自分が、今まで生きることに何の意識もせず、当たり前のように生きてこられていたことに、それが決して当たり前のことではなかったと気づいて改めて生きることを考える、それを聖書のみ言葉に照らして考える、そんな内容です。その一方で、「胎内記憶」や「出生前心理学」といわれる分野の話題も共有します。生まれる前、母親の胎内にいた頃の記憶、さらには胎内に宿る以前の記憶がある子どもたちの記録です。実

際にそのような子どもたちと多くかかわってきた医師たちの体験と記録を紹介するので。たとえば、13歳の男の子。母親のお腹に入る前は、雲の上から母親選びをして、その母親に決めたのは、自分にとっての使命の為だと言うのです。自分たち子どもの多くは使命を担って生まれてくるというのです。しかもその使命の大体は家族の為だと。自分が生れることで家族が仲良くなるとか…。私はそこで、エレミヤ書の言葉を紹介しています。エレミヤが預言者として神から選ばれるシーンで伝えられた言葉。『わたしはあなたを母の胎内に造る前からあなたを知っていた。』（エレミヤ書第1章5節）

私は、この授業を前任校の頃から数えると断続的ではありますが、10数年間やってきています。そして生徒たちの中にも胎内記憶や出生前の記憶のある生徒はいることを経験として知っていますので、必ず授業で「そういう記憶ある人〜？」と尋ねています。学年やクラスの雰囲気にもよりますが、今年度授業中に手をあげてくれた生徒はゼロ。でも授業後に「先生」と近づいて来て、報告してくれた生徒は2、3名いました。ところがなんと、前期中間試験のレポートで、自分の人生について振り返って書いてもらったところ少なくともさらに3名の生徒が新たに報告をしてきていました。

与えられましたふたつのみ言葉。実は私が授業の主題聖句として設定し、生徒たちと共に聴きいることにしている聖句です。

「主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」(創世記2:7)

「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ、律法と預言者である。」(マタイ7:12)

創世記の言葉からは、特に「命の息を吹き入れられ」という言葉と「生きるものとなった」という言葉に着目し、まず「命の息を吹き入れられる」ということについては、そもそも「息」と訳されているヘブライ語には、「息」、「風」、「霊」という意味があり、目には見えない神の存在を表わしているということ、その神によって人は生まれながらにして「生きる力」を備えられている存在であることを強く伝えます。更に、「生きる者となった」という言葉からは、人間は、生きることができるとされて、生まれてくる・この世に生を与えられる存在であることを共有します。つまり人は、神によって生きることができるとされている存在なのです。次に、マタイによる福音書7章12節からは、キリストは、人が人との関係性の中にあることを前提とし、まず自らが他者へ関わりをもつこと、仕えることをわたしたち人間に勧められておられるということ^{を共有しています。}

今日のこの礼拝に神さまによって呼び集められたお一人おひとりは、それぞれにこれまで生きてきた・生かされて生きてきた年月は異なります。ご自分の誕生、幼い頃、そして今に至るまでの歩み・出来事・出会いをふり返ってみてください。今自分が置かれている人との繋がり、そしてそのところにおいてどのような使命を与えられ、どのように生きようとしているのかをイメージしてみてください。

私たちが置かれている人との繋がりのひとつが、宮城学院の教職員という、一日の大半を過ごす繋がりでもあります。それは、こども園、中高、大学・大学院というそれぞれに分かれたところでの働きとそこにおける繋がりです。同時にまた、こうして共に礼拝を守り・献げているということは、所属は違えども、個々別々の学校の根底に共通して流れているもの、この学校法人宮城学院の根底に流れているものを再認識し、そこにおける自分の存在意義・使命を確認する機会として与えられているのがこの礼拝のときであると思うのです。そんな視点を心に留めて、日々の歩みを感謝しつつ生きるものでありたいと思います。

祈祷

お祈りしましょう。

今日も命をありがとうございます。み言葉をありがとうございます。あなたによって宮城学院に呼び集められている私たちが、こうして生かされて共に生きることを得ているその意味を心に留めてこれからも共に歩むことができる私たちでありますように。この一言の感謝と願い、わたしたちの救い主、イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。